

フロイトは滑稽の多種多様性を考察していますが、それは機知に結びついた快の獲得とはどのようなものなのかを把握するためでした。「不器用か、馬鹿¹」なふりをする特定の人物に適用される滑稽と、諸状況やパロールから他人に馬鹿にされることを狙ったものとを、彼は区別します。

自我のうぬぼれを暴いたり、同一化の支えとしての他者のイメージを茶化することがそこで問題になっているとすれば、滑稽の意味作用が「あなたが半神のように崇拝するこの人あの人は、あなたや私みたいな人間にすぎません²」という警告なのです。

ラカンが滑稽の中心には<他者>と愛の問題が存在すると示すことで、この問題を再び取り上げます³。

パロールにおける滑稽

滑稽の効果は、まずラング（ことば）の結晶上に、つまり同音異義的、多義的で二重の意味があるパロールにおいて物質的に理解されるものに基きます。解釈のおかげで、分析家はシニフィアンはこの物質性を反響させて、それは文字に変わります。文字においては詩と滑稽はメタファーに立脚する共通の出自をもつものです。

ここで、「治療的な道具」としてのユーモアは少しも問題とはなりません。精神分析においては、人は冗談に頼りつつ泣くよりも笑うほうが良いですよと分析主体にほめかすことはありません。そんなことをすれば自我にむかって超自我に話をさせることになってしまうでしょう。「見てごらん、この世界はあまりに危険に満ちてみえるけどこんなものなんだよ。子どもの遊びなのだから、冗談にしまえばよいんだよ！⁴」と。

ふたつの滑稽

そうです。精神分析において症状は解説されますが、それは症状のシニフィアンの側面のことです。各自における症状は、主体の不透明さと意味の除外によって、より現実的なものでもあるのです。臨床における滑稽とは、この二重性に関連づけられます。

このようにして笑いの本質についてのボードレールの研究を喚起しながら、ジャック・アラン＝ミレールは Witz 機知のような語にまつわるシニフィアンとシニフィエの滑稽と、その滑稽な諸効果における対象 a の欲動的滑稽とを区別しています⁵。

もしかりに分析主体が自身の言うことの滑稽を理解するのであれば、彼はそこにどのような用途を見出すのでしょうか。意味と無意味（ナンセンス）の利用でしょうか？そしてなぜ、分析的治療において過渡的な仕方で楽しい気分の高揚というものが現れるのでしょうか？

¹ Freud S., *Le Mot d'esprit et sa relation à l'inconscient*, Paris, Gallimard, 2009, p. 352.

² Ibid., p. 357.

³ Cf. Lacan J., *Le Séminaire, livre V, Les Formations de l'inconscient*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1998, p. 134.

⁴ Freud S., « L'humour » (1927), *Œuvres complètes*, t. XVIII, 1926-1930, Paris, PUF, 2002, p. 140.

⁵ Cf. Miller J.-A., « Vicissitudes du valet », *Ornicar ?*, n° 59, novembre 2024, p. 175.

幼児の滑稽

ラカン⁶は、主体は欲動の水準では幸福なことを強調しています。自我の知らないうちに欲動は常に自らを満たしているからです。ところでフロイトによると、気分の滑稽とは、現実の試練が課した自己愛の傷と直面する自我の防衛です。滑稽な形式をとる気分は、現実的なものに対して抑圧なく生じる最も効果のある防衛であると、私たちは言うことができます。

そういう理由で、幼児にみられる滑稽は、それが超自我による滑稽への貢献であるという提案⁶を解明することのできる、ひとつの臨床となるのです。小さな子どもにおいては、滑稽は想像的なものに結びついていて、その子は周囲の者を喜ばせるもので楽しめます。それより年齢が上の子どもは＜他者＞にむけて滑稽を操り、ひとつの語が沢山の意味をもちうることを把握します。その滑稽さは、サディズム、窃視症、露出症、肛門対象とファルスの自体愛とともに、幼児の性的組織にも等しく還元されます。したがって、遊戯との関係において、そして子どもの精神分析におけるその機能において、幼児の滑稽の射程を研究することが課題になるでしょう。

つかの間の人生

症状形成のなかに巻き込まれた幻想と無意識の欲望を説明するために、フロイトはエディプスの悲劇を、その同じ名のコンプレックスを発明しながら利用します。さらに、トーテムとタブーの神話は、あらゆる女性を享樂する権力に異議申し立てをする息子たちによる、父の殺害に関わるものです。この話題について、ラカンは、フロイトは悲劇よりも喜劇に神経症を結びつけることができただろうに、なぜならただひとりの女性を満足させるだけでも男性にとっては難しいからだ、と述べています。

これはラカンが喜劇（滑稽）を、概念—もしお望みなら理想—と人生の現実的なものとのあいだの隔たりにおいて位置づける、やり方のひとつにすぎません。彼は喜劇上の英雄の美しいメタファーによって、それを説明しています。不運にもかかわらず、英雄はつねに切り抜け、どうにかこうにか自身のちょっとした冒険物語を続けるのです。

ファルスをこのつかの間の人生のシニフィアンとして定義しながら、ラカンは滑稽を人生の感情に関係づけています⁷。

道化師の滑稽

それでは人生の感情が欠けている場合、滑稽は何に対応するのでしょうか。メランコリーの耳障りな滑稽や、躁的な狂ったような笑いが問題となるのでしょうか？精神病における嘲笑的な滑稽を把握するには、その滑稽が＜他者＞の滑稽であること以外にはどうしたらよいのでしょうか？自らを愚弄しながら笑いものにすることで、緩和されるでしょう。世界に存在することが空しく、さらには不条理であるような、関心事をもたない人物によって、いったい誰が享樂することを欲するのでしょうか。＜他者＞の享樂から身を防衛するために、自己のカリカチュアのように転移において自らを表すこと、それは臨床

⁶ Cf. Freud S., « L'humour », op. cit., p. 140.

⁷ Cf. Lacan J., Le Séminaire, livre VII, L'Éthique de la psychanalyse, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1986, p. 362.

においてあらわれる滑稽の諸面のうちのひとつです。

自己愚弄というこの道化師の滑稽は、＜他者＞は存在しないという、皮肉な臨床に還元されるのでしょうか⁸？それが証明されるか破棄されるかは大会でわかるでしょう。

愛の滑稽

ラカンにはさらに精神病の滑稽について、セミネールのひとつで喚起しています。そこでは女性が存在するということを信じ、生涯をかけてその女性を探すことが問題になるだけではありません。言語性の幻覚があたかも問題となるかのように、その女性が言うことすべてを信じながら一人の女性を選ぶことが問題になっています⁹。

滑稽の別のパラダイムとしては、ひとつの対象にたいするユニークな情熱という滑稽があります。愛する女性の小箱の享樂にしがみついた守銭奴は、その有名な一例です。お金というよりも拝金性—＜もの＞に隣接して位置づけられた無であるところの拝金性です—こそが、そこに閉じ込められているのです¹⁰。

愛の滑稽とはそのうえ、一をなすしかないという幻影に支えられていて、ふたつの背中が合わさった動物というアリストファネスの作り話がそのよい例です¹¹。かりにエディプスの悲劇がふたつの性におけるあの問題の最終回答でないとしても、ラカンはその中心に隠されたひとつのシニフィアンを見つけだし、滑稽の本質としてファルスを定義することを教えています。

愛の滑稽とはファルスである、もしくはファルスを持つ、という幻想のパントマイムに対応するのでしょうか。無意識的なふたつの知のあいだの偶然的な出会いは必ず、おかしなごたまぜを生み出さないでしょうか¹²。

滑稽の王道

今日、ひとりでの満足は3回クリックするだけで接近できるポルノグラフィーによって奨励されています。言い方を変えるなら、馬鹿な者の享樂はもはやタブーではなく、メインストリームとなったのです。

精神分析家たちはそれについて何を述べるのでしょうか？臨床における滑稽は、文化の中の居心地悪さの広がりをつめる王道ではないでしょうか？それは無意識におけるふたつの性のあいだの関係のなさを指摘する、指標なのではないでしょうか？

ECFの55回大会は皆さんに開かれています。精神分析のこの大いなる、最も真剣な私たちの滑稽な出会いに、大勢で集おうではありませんか。

⁸ Cf. Miller J.-A., « Clinique ironique », La Cause freudienne, n° 23, février 1993, p. 7-13.

⁹ Cf. Lacan J., Le Séminaire, livre XII, « R.S.I. », texte établi par J.-A. Miller, Ornicar ?, n° 3, mai 1975, p. 110.

¹⁰ Cf. Lacan, Discours aux catholiques, in Le Triomphe de la religion, Paris, Seuil, 2005, p. 60.

¹¹ Cf. Lacan J., Le Séminaire, livre XIX, … ou pire, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2011, p. 181.

¹² Cf. Lacan J., Le Séminaire, livre XXI, « Les non-dupes errent », leçon du 15 janvier 1974, inédit.

それでは近いうちにまたお目にかかりましょう。